

著効例からみた 柴苓湯の長期投与での可能性

成田赤十字病院 眼科※ 横内 裕敬

キーワード

- 柴苓湯
- 糖尿病網膜症
- 黄斑浮腫
- 眼科

柴苓湯は産婦人科や整形外科などにおいて浮腫に幅広く使われている。眼科領域においては今までも糖尿病網膜症の黄斑浮腫に対しての報告がいくつかあるが、今回当院において黄斑浮腫に柴苓湯が有効であった症例を経験したので報告する。

※本稿執筆当時。現在は千葉大学医学部附属病院眼科にご所属です。

はじめに

糖尿病の眼合併症において糖尿病黄斑浮腫は、網膜神経線維実質層に浮腫を起こした状態であり、視力障害をきたす重要な因子である。糖尿病黄斑浮腫の治療法は、レーザー網膜光凝固術(photocoagulation: 以下PC)に始まり、トリアムシロン等の局所ステロイド投与¹⁾、硝子体手術等、様々な方法が現在施行されている。柴苓湯は以前より黄斑浮腫に対して使用されており²⁾³⁾⁴⁾、その効果も報告されている。本稿では柴苓湯が著効した症例を提示し、若干の考察を加えて報告する。

症 例

症例1: 66歳、女性

X年2月当院受診。近医内科より眼底精査にて紹介受診。初診時は矯正視力右1.0、左1.0、ナテグリニド内服治療中の糖尿病(HbA1c 7.7%)があり、眼底は新福田分類で右A I、左A I程度であった。その後血糖コントロールは良好(HbA1c 5%台)であったが、X+1年7月頃より左眼底にしみ状出血、硬性・軟性白斑を伴う黄斑浮腫が出現し、矯正視力左0.2まで低下した(図1a, b)。この時点で患者にPCを勧めるも拒否したため、クラシエ柴苓湯エキス細粒(EK-114、以下柴苓湯)8.1g/日を1日3回、食前もしくは食間に服用した。その後も視力低下が進みX+1年10月には矯正視力左0.05になった。柴苓湯投与後半年より黄斑浮腫が軽減していき、X+2年12月には矯正視力右1.5、左0.15まで回復し、自覚症状も改善、左眼底も一部硬性白斑が残るも黄斑浮腫が軽減した(図2a, b)。

図1a, b X+1年7月頃

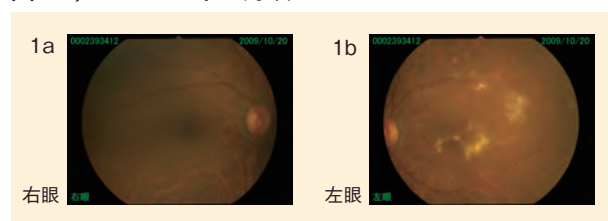
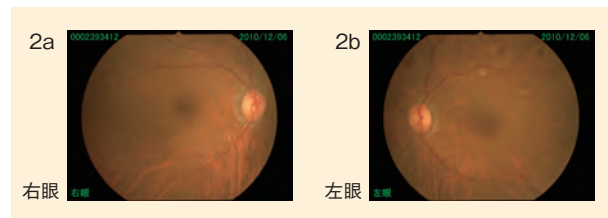


図2a, b X+2年12月



症例2: 57歳、女性

X年11月当院受診。主訴は数ヶ月前からの両眼の視力低下であった。矯正視力は、右0.06、左0.2。眼底は、両眼ともに線状・点状出血、軟性白斑を伴う広範囲の黄斑浮腫がみとめられた。また検査により、糖尿病(HbA1c 12.1%)と高血圧(214/110mmHg)が見つかった。糖尿病に対してインスリン療法、高血圧に対しては、オルメサルタンメドキシミル内服が処方された。眼科においては、右眼BⅢM 左眼BⅢMにて、X+1年1月より両眼に対しPC開始。X+1年3月より柴苓湯8.1g/日を1日3回、食前もしくは食間に服用した。インスリン療法により糖尿病コントロールが良好(HbA1c 6%前半)になり、PCを施行するも黄斑浮腫が改善せず視力低下も進行した(図3a, b)。5月には矯正視力右0.05、左0.07まで低下した。その後も視力低下は止まらず、10月には矯正視力右0.05、左0.04まで低下した。しかし柴苓湯服用開始から半年が経過した頃より、自覚症

状、並びに眼底所見が改善し始め、服用開始から1年半を経過したX+2年8月頃から、両眼ともに黄斑浮腫の改善が顕著になっていき、視力改善(矯正視力右0.1、左0.06)が認められた(図4a, b)。

X+3年2月には、左眼に乳頭周囲に増殖膜形成がみられるも、黄斑浮腫は激減し、矯正視力右0.1、左0.09まで改善した(図5a, b)。

図3a, b X+1年 3月

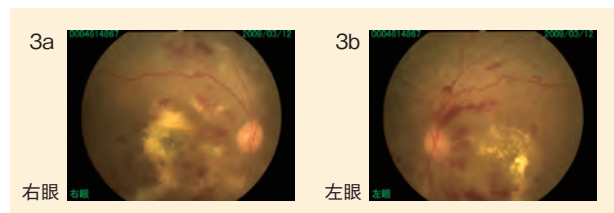


図4a, b X+2年 8月頃

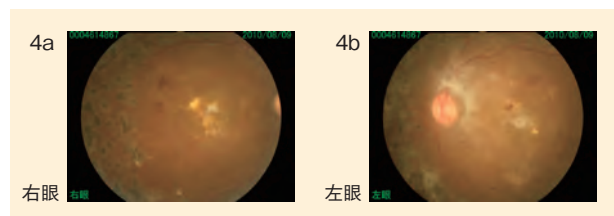
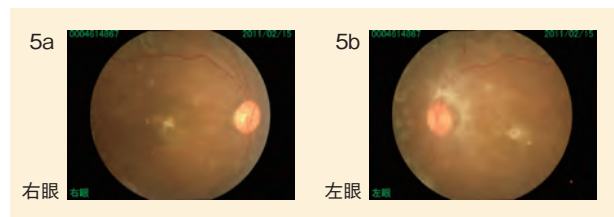


図5a, b X+3年 2月



考 察

現在、糖尿病網膜症は厳密な血糖コントロールはもちろんのこと、PCやステロイド局所療法、硝子体手術により進行を抑制できるようになってきたが、依然として治療に抵抗性を示すことが多く視力低下の原因として重要な疾患である。最近では、抗VEGF抗体の注射なども試みられている。以前には黄斑浮腫における柴苓湯の臨床効果を評価する報告²⁾³⁾⁴⁾がいくつかあったが、最近では2008年に佐田ら⁵⁾が光干渉断層計(Optical Coherence Tomography: 以下OCT)による黄斑浮腫の評価をした報告があるのみである。

柴苓湯は、小柴胡湯と五苓散の合剤であり、利尿作用、血管透過性抑制作用、抗炎症作用、抗アレルギー作用などを有する。このうち抗炎症作用、血管透過性抑制作用と利尿作用が黄斑浮腫改善に関与していると考えられる。実際、腎炎やネフローゼ症候群などの腎疾患⁶⁾、妊娠中の浮腫⁷⁾に利用されている。今回の症例は、黄斑浮腫が存在するも患者がPCを希望

せず、やむなく柴苓湯に頼った症例と、PCを施行するも黄斑浮腫が軽快せず、なおかつ硝子体手術等を患者が希望しなかったため、柴苓湯を使用した症例であり、黄斑浮腫に対する長期的な効果を追うことができた貴重な2症例である。実際には硝子体手術、ステロイド局所療法による黄斑浮腫治療は効果を示す。だが、どの施設でも施行できるものではない。また患者側からしても、移動時間をかけて遠方の手術設備の整った大学病院等まで行きたくない、交通手段がない、さらに高齢のためもはや手術自体を希望しない場合もある。このように地方の医院、クリニックでは様々な問題を抱えて積極的な治療・手術を見合わせている例も見受けられる。しかしそうした場合でも漢方療法は、副作用も少なく安全に長期間投与可能であり、少なからず効果があるのではないかと考える。漢方薬は一般にその作用の発現が緩やかであり、長期にわたり服用しなければならないことも多く、筆者の柴苓湯使用経験からすると、服用開始から半年程度で自覚症状が改善され、1年経過するあたりで効果がみられる症例が多数あった。この経過を自然経過と捉えるか、柴苓湯の効果と捉えるかは今後もさらなる検討が必要ではあるが、PCにて効果の及ばない時期からの改善が認められた症例もあることから、柴苓湯による効果と考えても良いのではないだろうか。将来的には症例数を増やしていくとともにOCTなどを用いて黄斑浮腫を定量化することにより効果を評価していきたい。

まとめ

糖尿病黄斑浮腫に対して柴苓湯の長期投与が有効であった2症例を提示した。今後のさらなる検討を必要とするが、糖尿病黄斑浮腫における柴苓湯の使用を選択肢の一つとしてもう一度見直していきたいと考える。

【参考文献】

- 1) 沖田和久：糖尿病黄斑浮腫に対するトリウムシノロンの効果 眼科臨床医報 99(11)：p929, 2005.
- 2) 池上靖子：黄斑浮腫を伴う症例に対する柴苓湯治療の臨床的検討 眼科臨床医報 85：p1884-1888, 1991.
- 3) 小柳宏：柴苓湯による糖尿病黄斑浮腫の治療 眼科臨床医報 87：p535-537, 1993.
- 4) 広川博之：黄斑浮腫に対する柴苓湯の使用経験 眼科臨床医報 88：p570-573, 1994.
- 5) 佐田敏朗ほか：光干渉断層計を用いた糖尿病黄斑浮腫に対する柴苓湯の有効性の評価 横浜医学 59：p495-499, 2008.
- 6) 吉川徳茂ほか：小児ステロイド反応性ネフローゼ症候群 柴苓湯併用症例における初期ステロイド治療の期間と再発 日腎会誌 40(8)：p587-590, 1998.
- 7) 武内享介ほか：浮腫を伴う妊娠中毒症に対する柴苓湯の効果 産婦人科漢方研究のあゆみ 17：p164-167, 2000.